The Nonprofit Review, Vol.10, No.1, 1–11 (2010)
JANPORA©2010

参加したいボランティア活動の種類と動機の関係

森　保文[1)]・森　賢三[2)]・犬塚　裕雅[3)]
前田　恭伸[4)]・淺野　敏久[5)]・杉浦　正吾[6)]

[1)]国立環境研究所・[2)](株)インテージ・[3)]一般社団法人CAT・[4)]静岡大学工学部
[5)]広島大学大学院総合科学研究科・[6)](株)杉浦環境プロジェクト

The Relationship between Types of Voluntary Activities in which People Participate and their Motives for Participation

Yasuhumi MORI[1)], Kenzo MORI[2)], Hiromasa INUDUKA[3)], Yasunobu MAEDA[4)]
Toshihisa ASANO[5)] and Syougo SUGIURA[6)]

[1)]National Institute for Environmental Studies
[2)]Intage Inc.
[3)]CAT
[4)]Shizuoka University
[5)]Hiroshima University
[6)]Sugiura Environmental Project Inc.

In the search for ways to encourage more participation in voluntary activities, more attention is being given to what motivates people to participate. In empirical studies, however, the relationship between motives and participation in voluntary activity has not yet been made clear. To understand how to enable more effective recruitment of volunteers, the differences in participatory factors depending on the type of voluntary activity were studied. We used the data from a web survey to analyze the relationship between (1) motives, (2) social background factors such as gender, as well as (3) economic elements, and (4) the type of voluntary activities in which people seem to want to participate. Each voluntary activity was related to different motives and social backgrounds. Therefore it was thought that the types of voluntary activities in which a recruit would be interested could be selected according to their motives for participation and their social background elements.

Key words: employment type, age, sex, having children, Dominant status model, retention

1. はじめに

NPO などの市民団体が実施する事業においては，多くの場合，ボランティアの協力が不可欠であり，その獲得のために努力が重ねられているが十分に成功していない．9 割の人がボランティア参加を希望しているとの報告（飯塚市 2001）がある一方，実際にボランティア活動に参加している人は 5% 程度とされている（内閣府 2005）．市民をボランティアとして各種活動へ誘導するためには，ボランティア参加の要因を理論的に明らかにすること，及びそれを応用して効果的なボランティア獲得方法を実践することが必要である．

ボランティア活動には福祉支援から環境保護まで多様な活動が存在するが，従来ボランティア活動は一括りで扱われることが多く，活動の種類によるボランティアの違いは考慮されてこなかった．もしボランティア参加者の特性がボランティア活動の種類によって異なるとすれば，あらかじめ活動の種類に応じて希望者を選択することで，効率的にボランティアを募集することが可能である．例えばボランティア希望者の事前登録がなされている場合には，個人の志向を事前に聞くことによって，参加者に合致したボランティア活動を効率的に提示できる．むろん，直接にボランティア活動のリストを提示する方法もあるが，活動種類が多い場合や，本人自身がどんなボランティアをしたいかはっきりしない場合には，いくつかの個人の志向から，ボランティア活動の種類を絞ることが効率的である．

動機は当然のごとくボランティア参加に関係がある

と思われているが，実証研究においては十分にはその関係が明らかになっていない．特にボランティアの種類を細かく分けた場合の参加者の動機の差異には不明な点が多い．本研究では，個人の志向として，動機（ボランティア参加に何を期待するか）を取り上げて，社会的背景や経済的要因と共に，これらと種類別のボランティア活動との関係を明らかにする．

2. 先行研究

ボランティア参加に関係する要因としては，社会背景または人口統計的なもの，心理的なもの及び経済的なものの三つが主に取り上げられてきた．社会背景・人口統計的な要因には，性別，年齢，職業，収入などが含まれる．心理的な要因は，通常は動機と呼ばれている．経済的な要因には，収入，賃金率及び寄付などが相当する．

Lemom et al.（1972）は，職業や教育など社会的に高い階級に関係する要因や中年齢，男性などの要因がボランティア組織への参加と関係することから，社会背景・人口統計的な要因においては Dominant status な条件がボランティア組織への参加を促進すると解釈した．このモデルは因果関係に言及していないが，集団の中で優位にある人（例えば，コミュニティーの中で高学歴の人など社会的地位が高いとみなされる人）の方がボランティアにより多く参加するというものである．Smith（1994）はボランティアの決定要因について先行研究を概観し，社会背景に関係する要因は Dominant status モデルによってよく予測できるとした．ただし，このモデルと矛盾する報告もあり，この点は Smith も言及している．例えば性別はボランティア組織の活動などへの参加と関係がなかった（Auslander and Litwin 1988），健康や教育関連のボランティア参加は女性の方が多かった（Sundeen and Raskoff 1994）との報告がある．

心理的な要因を意味するボランティア参加の動機は，いくつかに分類されている．Chinman and Wandersman（1999）は，Clark and Wilson（1961）に従って動機を三つに分類し，関連する論文を概観して，研究をさらに進めることが適切としたが，動機と参加の関係について明確な結論を下していない．Clary et al.（1992）は VFI（Volunteer Functions Inventory）を作成し，その得点によってボランティア募集などを戦略的に行なうことを提案した．VFI には六つの動機が入っており，若者はその中の Career を重要としているとしたが，動機とボランティア参加の関係については明らかにしていない．Tschirhart et al.（2001）は五つに動機を分類し，その中の Social（友情や尊敬を得る）についての達成感（achievement）が将来のボランティア参加に弱い関係があることを見出したが，その他の動機はボランティア参加に関係がなかった．桜井（2005）は，ボランティアに参加している人を対象に，参加期間の長さを，七つに分類した動機で解析したが，結果を見ると有意な動機はほとんど見出せない．森山（2007）は，動機を大きく消費的動機と投資的動機の二つに分けて取り上げ，ボランティアに参加している人を対象に，参加期間の長さとの関係を解析したが，これらの動機の充足は 5% の危険率では有意となっていない．なお森山がここで使用している消費的動機と投資的動機という用語は便宜的な名称であって，次に述べる経済的要因とは異なり，効用関数を仮定したものではない．

心理的要因は，暗黙のうちに，動機が満たされるだろうと各人が期待する程度によってボランティア参加が決定されると仮定している．Clary らの VFI はこれを得点化し，Tschirhart らの達成感はこれを測定する試みと解釈できる．つまりコストとベネフィットを比較して意思決定を行なう合理的選択理論を採用していると言える．

合理的選択理論をより単純化すると，ボランティア参加に経済的要因を考慮することができる．心理的要因の動機におけるコストとベネフィットは，社会的なものや金銭的なものなど多様な価値を含むが，もしこれらの満たされる程度が一つの効用として計量できるとすれば，ボランティア参加を経済モデルで記述することが可能となる．

Menchik and Weisbrod（1987）は，ボランティア参加を通常の消費財とみなした場合と仕事の経験を得るための投資とみなした場合の経済モデルをそれぞれ消費モデルと投資モデルとして数式化し，検証した．その結果，ボランティア参加と収入に正の関係，賃金率に負の関係，寄付に正の関係があることなどから消費モデルが，中年齢から高年齢にかけてボランティア参加が低くなることから投資モデルが支持されるとした．ただし，ここでは収入はポテンシャルな収入を用い，寄付は税率を代理変数としている．また，消費モデルでは，寄付はボランティア参加と負の関係にあると予測され，投資モデルでは，若年齢から中年齢にかけてもボランティア参加は減少するはずであるから，この解釈にはやや恣意的な点が指摘できる．

賃金率とボランティア活動の関係についても，関係がない（Freeman 1997），負の関係がある場合とない場合がある（跡田・福重 2000）というように，異なる結果が報告されている．所得とボランティア活動の関係

については，関係がないことが報告されている（跡田・福重 2000）．ボランティア活動と寄付については，正の関係を持つとの報告（Freeman 1997）と負の関係にあるとの報告（山内 2001）があり，正反対の結果を示している．

合理的選択理論に対して，Mori et al.（2008）は，ボランティア参加と収入に関係が見られず，レジャー，寄付，関心事の多さ及び特定の情報源と正の関係が認められたことから，ボランティア参加はコストとベネフィットの比較によるのではなく，機会への接触程度に依存する可能性を示している．また参加の意向と参加をやめる交通費の関係から，コスト・ベネフィットに関係がないボランティア活動が存在することが示されている（森ほか 2008）．

以上のように，ボランティア参加を決定する要因はいくつか提案されているが，それが重要な要因であるのかどうかは，いまだに明らかとなっていない．この原因の一つと推定されるのが，ボランティア活動の分類である．

多くの先行研究においてボランティア活動は一括りで扱われているが，数種類に分類したボランティア活動を対象としたものも存在する．例えば，Sundeen and Raskoff（1994）は健康系や教育系などの 7 種類に活動を分けて，性別などの参加者の特性が分類間で異なることを示した．桜井 （2007）は高齢者分野や青少年・子ども分野などの 6 種類に活動を分けた場合，活動対象分野によって参加動機に特徴が見られることを見出している．これらは，ボランティア活動の分類をさらに適切にすることで，分類毎に重要なボランティア参加の決定要因を把握できる可能性を示唆している．例えば環境分野のボランティア活動を考えた場合，海岸での油回収と生物の生息地保護では作業内容は大きく異なり，当然参加に関係する要因も異なると予測される．

以上をまとめると，ボランティアを募集及び仲介することを想定した場合に，個人の特性からボランティアに参加したいと感じる人を探し出すことに効果的な要因は十分には明らかになっていないが，ボランティア活動を分類することで，その活動に関係する要因を特定できる可能性が示されている．本研究はこの点に着目して，さらに分類を細かくすることでボランティア活動参加に関係する要因を検討する．

3. 調査の目的と方法

3.1. 目的

本論の目的は，ボランティア活動を細かく分類した場合に，ボランティアの募集及び仲介を効率的に行なう上で役に立つ要因を把握し，その効果がどの程度なのかを検証することにある．従来議論されてきたボランティア参加に関係する要因が，必ずしも常に有意でなかった理由としては，次の二つの可能性が考えられる．一つは，ある要因がある特定の活動と強く関係している場合，取り上げたボランティア活動によって結果が異なる．あるいはその分類の中に要因の効果の傾向が異なる活動が含まれているため，要因の効果が打ち消しあって見かけ上効果がないように見える．二つ目は，実際に要因の効果が小さいために，有意な結果が出ていない．そこで本論では，なるべくボランティア活動の種類を細かくかつ多くとって検証を進める．

3.2. 変数の選択

取り上げた要因は，社会背景的なもの，心理的動機及び経済的要因（表 1 参照）．社会背景的な要因として，先行研究を参考に，性別，年代，職業及び年収を取り上げた．これらは Dominant status モデルで説明されているものである．

心理的動機としては，Clary et al.（1992）と Tschirhart et al.（2001）の分類を参考にして，5 分類に区分される九つの動機（ボランティア活動参加時に期待すること）を取り上げた．「人々とふれあえる」と「仲間が広がる」は友情や尊敬に関係するもので，社会的動機（social）と呼ばれることが多い．「身体を動かせる」と「活動が楽しい」は自己尊重（self-esteem）に含まれるであろう．「自然とふれあえる」は従来提案されている動機とはやや異なるが，環境系の活動においては重要な動機であるので取り上げた．これも自己尊重に含まれる．「人の手助けができる」と「社会の役に立つ」は利他的な動機といえる．「居場所が見つけられる」は回避（avoidance）や防衛（protective）と呼ばれる動機である．「技術が身につけられる」は経歴 （career）や手段（instrumental）または理解と呼ばれる動機である．日本においては，ボランティアで得た経験が就職などに役に立つ状況にはまだないので，ここでは，経歴と理解（経験を積めること）を一緒に扱っている．

経済的要因としては収入を取り上げた．収入は Dominant status モデルでも扱われているが，経済モデルでは高収入は消費財としてのボランティア活動への参加を増加させると解釈される．

ボランティア活動としては，福祉，子育て，町おこし，環境を意識しながら具体的な活動内容がイメージできる活動を 15 種類取り上げた（表 1 参照）．この場合，各活動を分類することにあまり意味はない．例え

ば「街なかのごみ拾い」は，町おこしにも環境にも関係し，子育てにも関係するかもしれない．むしろ，「街なかのごみ拾い」を同じく町おこしに関係する「イベントの運営」と比較して，あるいは環境に関係する「海岸での油回収」と比較して有意な参加要因がどう異なるかを把握することの方が，ボランティアの募集や配置を考える上で重要である．

動機とボランティア参加の関係については，二つの段階を考える必要がある．一つはボランティアを開始する時の動機であり，もう一つは動機の充足によるボランティア参加の継続である．本論は前者の段階を主な対象としている．ボランティアの開始と継続は共に，動機が満たされるという予想の程度に関係するという点で同じであるが，継続の場合には実際に動機が充足された程度から次の参加における充足の程度を予想できる点が異なっている．桜井（2007）は参加動機と活動継続要因を明確に分ける必要性を論じ，活動継続においては参加動機に加えて状況への態度要因を考慮した．本研究では，状況への態度要因は扱わないが，この要因の一部と参加動機の達成感はほぼ同じものを意味していると考えられる．例えば集団性（ボランティア同士の人間関係の満足度など）及び自己効用感（対象者や社会の役に立っている実感など）はそれぞれ，社会的動機（仲間が広がるなど）及び利他的動機（社会の役に立つなど）または自己尊重（活動が楽しいなど）の充足度と大きく重なっている．

後者の動機の充足については，ボランティア種類ごとのデータを収集しなかったので，ボランティア開始において各種類に共通的に有意な動機と，種類を問わないボランティア活動全体への取り組みの程度との関係から，若干の考察を加える．

3.3. 回帰分析

以上の関係を回帰分析を用いて検証する．従属変数として 15 種のボランティア活動についてそれぞれ取り組んでもよいと思うかどうか（1：思う，0：思わない），または種類を問わないボランティア活動への取り組みの程度を 5 段階で取り上げた．動機と社会背景的要因及び経済的要因を独立変数とし，15 種のボランティア活動を従属変数とした場合は，ロジスティック回帰を用いた．またボランティア活動への取り組みの程度を従属変数とした場合は重回帰及び順序ロジット回帰の二つを用いた．これは，ボランティア活動への取り組みの程度を順序尺度とみなすことが可能である一方，今回のように厳密な予測式を作ることではなく有意な要因を探索することが主要な目的である場合には，重回帰分析にいくつかの利点があるからである．重回帰分析においては，標準化係数を用いることで，独立変数を基準化してその影響の大きさを比較することができる．また直感的に結果を理解することが容易である．本論でも必要に応じて標準化係数によって独立変数を評価した．

なお独立変数間の共線性を検討したところ，職業間に若干高い相関が見られたものの，分析結果に影響するような共線性は認められなかった．

3.4. データの収集方法

データは，2006 年 3 月 9 日から 13 日にかけて，性別，年齢（20–59 歳），地域（都道府県）を人口構成比に合わせた WEB 調査により収集した．回収率は 46%（発信数 12,000，有効回答数 5,488）であった．回答者は取り組んでもよいボランティア活動を 15 種の中から，ボランティアに参加する場合の期待を 9 種の中から複数回答で選択した．ボランティア活動については「取り組んでもよいと思える活動はありますか」，期待については「ボランティア活動に参加する場合，どのようなことを期待しますか」という設問を使用した．なお，ボランティア活動においては，回答者は参加してもよい活動を選択しているのであって，実際に取り組みに至る人数は，回答者数から更に減少したものになる点に留意する必要がある．しかしながら，取り組んでもよいと思っている人に働きかけた方が，そうでない人を対象にするより効率的であることは十分に予想されるであろう．

この調査は，登録されたモニターからサンプリングするクローズド型の WEB 調査であり，得られる結果は，信頼性が高いとされる無作為抽出による訪問調査の結果とは異なる可能性がある．しかしコスト及び労力の面から WEB 調査は現実的であり，また数値の比較には注意が必要であるが，変数間の関係の有無の判定には十分なデータが得られると考えられる（労働政策研究・研修機構 2005）．

3.5. サンプルの概要

データの記述統計量を表 1 に示した．取り組んでもよいボランティア活動の中では，街なかのごみ拾いや子どもの安全監視が比較的多くの人から挙げられ，逆に里山の保全と雪下ろしを挙げる人は少なかった．動機については，「人々とふれあえる」と「人の手助けができる」を挙げる人が多く，「技術が身につけられる」を挙げる人は極めて少なかった．

表 1　記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
取り組んでよいボランティア活動					
取り組みの程度[1]	5488	1	5	2.25	1.10
街なかのごみ拾い	5488	0	1	0.36	0.48
農作業の手伝い	5488	0	1	0.17	0.37
地域の観光案内	5488	0	1	0.14	0.35
海岸での油回収	5488	0	1	0.06	0.24
街なかの植樹	5488	0	1	0.16	0.37
老人のお世話	5488	0	1	0.12	0.32
子どもの安全監視	5488	0	1	0.29	0.46
生物の生息地保護	5488	0	1	0.14	0.35
里山の保全	5488	0	1	0.11	0.31
雪下ろし	5488	0	1	0.11	0.31
子どもの遊び支援	5488	0	1	0.21	0.41
障害者の支援	5488	0	1	0.15	0.36
山・川・海辺のごみ拾い	5488	0	1	0.23	0.42
震災支援	5488	0	1	0.16	0.37
イベントの運営	5488	0	1	0.23	0.42
動機（ボランティア活動参加時の期待）					
自然とふれあえる	4180	0	1	0.36	0.48
人々とふれあえる	4180	0	1	0.59	0.49
身体を動かせる	4180	0	1	0.34	0.47
人の手助けができる	4180	0	1	0.56	0.50
仲間が広がる	4180	0	1	0.23	0.42
社会の役に立つ	4180	0	1	0.46	0.50
活動が楽しい	4180	0	1	0.40	0.49
居場所が見つけられる	4180	0	1	0.16	0.36
技術が身につけられる	4180	0	1	0.06	0.24
社会背景及び経済的要因					
性別[2]	5488	0	1	0.50	0.50
年代[3]	5488	1	4	2.62	1.12
子供有無	5488	0	1	0.59	0.49
会社員など	5488	0	1	0.48	0.50
自営業	5488	0	1	0.11	0.31
アルバイト	5488	0	1	0.14	0.35
主婦主夫	5488	0	1	0.17	0.38
学生	5488	0	1	0.06	0.23
無職	5488	0	1	0.05	0.22
年収[4]	5477	1	14	6.86	3.07

注：[1]「ボランティア活動に参加する」という行動は普段のあなたにどの程度当てはまるかという質問に対して，1：当てはまらない，5：当てはまるとした 5 段階の SD 法で測定.
[2] 性別は 0：男性，1：女性.
[3] 年代は 1：20 代～4：50 代.
[4] 年収は 1：100 未満～10：1000 未満，11：1200 未満，12：1500 未満，13：2000 未満，14：2000 以上，単位は万円.

4. 調査結果

4.1. ボランティア活動の種類別の結果

表 2 に動機と取り組んでもよいボランティア活動の関係を示した．最初の行に示したボランティア活動の種類別に，その活動に取り組んでもよいと思うかどうか（1：思う，0：思わない）を従属変数として，第 1 列に示した 18 個の要因，例えば自然とふれあえることを期待するかどうか（期待する：1，期待しない：0）を独立変数として，ロジスティック回帰を行ない，各独立変数の係数を示した．

個別に要因を見ていくと，例えば「自然とふれあえる」は生物の生息地保護や里山の保全と強い関係が認められ，これは当然と言えるが，農作業の手伝いや

表 2　動機と取り組んでもよい活動の関係

	街なかの ごみ拾い		農作業の 手伝い		地域の 観光案内		海岸での 油回収		街なかの植樹		老人のお世話		子どもの 安全監視		生物の 生息地保護	
	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比
自然とふれあえる	0.12	1.13	0.87 **	2.40	0.13	1.14	0.43 **	1.54	0.66 **	1.93	−0.11	0.89	−0.10	0.91	1.29 **	3.63
人々とふれあえる	0.26 **	1.29	0.21 *	1.24	0.53 **	1.70	−0.17	0.85	0.17	1.19	0.65 **	1.92	0.43 **	1.53	−0.07	0.93
身体を動かせる	0.65 **	1.92	0.58 **	1.78	0.28 **	1.32	0.42 **	1.52	0.38 **	1.47	0.18	1.20	0.08	1.08	−0.01	0.99
人の手助けができる	0.44 **	1.55	0.37 **	1.45	0.31 **	1.37	0.38 **	1.47	0.35 **	1.41	0.77 **	2.15	0.65 **	1.91	0.28 **	1.33
仲間が広がる	0.08	1.08	0.03	1.03	0.30 **	1.35	0.31 *	1.36	−0.12	0.89	0.42 **	1.52	0.20 *	1.22	0.02	1.02
社会の役に立つ	0.50 **	1.65	0.08	1.09	0.12	1.13	0.55 **	1.73	0.53 **	1.70	0.04	1.05	0.32 **	1.38	0.23 **	1.26
活動が楽しい	−0.12	0.88	0.12	1.13	0.50 **	1.66	0.30 *	1.36	0.38 **	1.46	−0.01	0.99	0.21 **	1.23	0.32 **	1.38
居場所が見つけられる	0.00	1.00	0.30 **	1.36	0.24 *	1.27	0.13	1.14	0.35 **	1.43	0.24 *	1.27	0.09	1.10	0.04	1.04
技術が身につけられる	−0.35 *	0.71	−0.01	0.99	0.11	1.12	0.09	1.09	−0.26	0.77	0.06	1.06	−0.11	0.89	0.06	1.06
性別	−0.11	0.89	0.03	1.03	0.30 **	1.34	−0.37 **	0.69	0.02	1.02	0.68 **	1.98	−0.19 *	0.82	−0.20	0.82
年代	−0.07	0.93	−0.16 **	0.85	0.06	1.06	−0.37 **	0.69	0.01	1.01	0.28 **	1.32	−0.26 **	0.77	0.09	1.09
子持ち	0.17 *	1.19	−0.30 **	0.74	−0.34 **	0.71	−0.23	0.79	−0.35 **	0.71	−0.60 **	0.55	1.17 **	3.22	−0.34 **	0.71
会社員	0.07	1.08	−0.21	0.81	−0.02	0.98	−0.15	0.86	−0.05	0.95	−0.16	0.85	−0.03	0.97	0.18	1.20
自営業	0.10	1.11	0.12	1.13	−0.01	0.99	0.25	1.29	−0.03	0.98	−0.12	0.88	0.24	1.27	0.27	1.31
パート	0.17	1.18	−0.26	0.77	−0.16	0.86	−0.31	0.73	−0.13	0.88	0.22	1.25	0.04	1.04	0.18	1.19
主婦主夫	0.16	1.17	−0.26	0.77	−0.16	0.85	−0.85 *	0.43	−0.08	0.92	0.03	1.03	0.53 **	1.70	−0.34	0.71
学生	0.13	1.14	0.02	1.02	0.03	1.03	−0.02	0.98	0.08	1.09	0.30	1.35	−0.04	0.96	0.54 *	1.72
年収	−0.01	0.99	−0.02	0.98	0.02	1.02	0.00	1.00	0.01	1.01	0.00	1.00	−0.01	0.99	−0.01	0.99
定数	−0.84 **	0.43	−1.50 **	0.22	−2.80 **	0.06	−2.04 **	0.13	−2.37 **	0.09	−3.58 **	0.03	−1.38 **	0.25	−2.42 **	0.09
取り組みたい人数	1968		913		761		350		867		647		1612		793	
Cox & Snell の R^2	0.070		0.100		0.057		0.061		0.074		0.075		0.108		0.087	
−2 対数尤度	5468.7		3947.4		3717.5		2143.3		3943.7		3274.7		5092.1		3677.8	

	里山の保全		雪下ろし		子どもの 遊び支援		障害者の支援		山・川・海辺の ごみ拾い		震災支援		イベントの 運営	
	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比	係数	オッズ比
自然とふれあえる	1.40 **	4.05	0.40 **	1.49	−0.04	0.96	−0.22	0.81	0.83 **	2.29	−0.04	0.96	−0.26 **	0.77
人々とふれあえる	0.27 *	1.31	0.07	1.07	0.68 **	1.97	0.44 **	1.55	0.11	1.11	0.15	1.16	0.57 **	1.77
身体を動かせる	0.03	1.03	0.40 **	1.49	0.03	1.03	−0.04	0.96	0.43 **	1.54	0.17	1.18	0.08	1.08
人の手助けができる	0.01	1.01	0.52 **	1.68	0.42 **	1.52	0.78 **	2.18	0.32 **	1.38	0.83 **	2.30	0.12	1.12
仲間が広がる	−0.10	0.91	0.04	1.04	0.26 **	1.30	0.55 **	1.73	−0.07	0.93	0.24 *	1.27	0.31 **	1.37
社会の役に立つ	0.27 **	1.32	0.21 *	1.23	0.13	1.14	−0.02	0.98	0.58 **	1.79	0.37 **	1.45	0.13	1.14
活動が楽しい	0.43 **	1.54	0.24 *	1.27	0.42 **	1.52	0.14	1.15	0.07	1.07	0.01	1.01	0.48 **	1.62
居場所が見つけられる	0.24	1.27	0.35 **	1.42	0.15	1.16	0.28	1.33	0.26 **	1.30	0.28 *	1.32	0.30 **	1.35
技術が身につけられる	−0.26	0.77	0.07	1.07	−0.06	0.95	−0.45	0.64	−0.30 *	0.74	0.04	1.04	0.48 **	1.62
性別	−0.82 **	0.44	−1.03 **	0.36	0.11	1.12	0.26	1.29	−0.24 **	0.79	−0.55 **	0.58	0.07	1.07
年代	0.35 **	1.42	−0.38 **	0.68	−0.55 **	0.58	0.15 **	1.17	−0.03	0.97	−0.27 **	0.76	−0.09 *	0.91
子持ち	−0.46 **	0.63	−0.35 **	0.71	1.00 **	2.71	−0.38 **	0.68	−0.08	0.93	−0.34 **	0.71	−0.27 **	0.76
会社員	−0.29	0.75	0.31	1.37	−0.04	0.96	−0.27	0.76	−0.14	0.87	0.03	1.03	0.04	1.04
自営業	−0.01	0.99	0.44	1.56	0.17	1.18	0.10	1.10	−0.09	0.91	0.16	1.17	0.13	1.14
パート	−0.32	0.73	0.16	1.17	−0.19	0.83	0.07	1.07	−0.26	0.77	−0.08	0.93	−0.13	0.88
主婦主夫	−0.48	0.62	0.02	1.02	0.21	1.24	−0.03	0.97	−0.28	0.75	−0.15	0.86	−0.30	0.74
学生	0.04	1.04	0.51	1.66	0.13	1.14	−0.14	0.87	−0.04	0.96	0.04	1.04	0.38	1.47
年収	0.00	1.00	0.00	1.00	−0.03 *	0.97	−0.01	0.99	−0.01	0.99	0.01	1.01	0.01	1.01
定数	−3.02 **	0.05	−1.48	0.23	−1.03 **	0.36	−2.47 **	0.08	−1.43 **	0.24	−1.20 *	0.30	−1.33 **	0.26
取り組みたい人数	609		593		1168		814		1279		900		1246	
Cox & Snell の R^2	0.108		0.104		0.107		0.063		0.093		0.089		0.071	
−2 対数尤度	2993.3		2955.4		4474.3		3845.9		4735.6		3964.7		4780.0	

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, N = 4174

山・川・海辺のごみ拾いにおいても強い関係があり，直接自然の保全・保護を対象としない活動にも関係することがわかる．海岸での油回収や雪下ろしにおいても動機の中では 2 番目に強い関係を示しており，確かに自然の多い地域での活動になることが多いが，作業自体は動機と一致しない活動との関連が見られる．

同様に，活動から予測できない関係がいくつも見られる．「人々とふれあえる」は街なかのごみ拾いでは有意だが，山・川・海辺のごみ拾いでは有意ではなく，「身体を動かせる」は地域の観光案内で有意である一方，子どもの遊び支援では有意でなかった．

ボランティア活動から見た場合，例えば里山の保全

では，木の伐採作業など身体的労働が不可欠であるので，「身体を動かせる」は重要な動機と予測されるし，人手不足を補う活動であるから「人の手助けができる」も重要な動機と予測されるが，結果は両者とも係数はゼロに近く，説明力を持っていなかった．

全体を見た場合，ボランティア活動の種類に共通して関係する動機は見当たらなかった．また同じ動機の組み合わせが関係するボランティア活動もなかった．「人の手助けができる」が有意であるボランティア活動が多かったが，それでも全ての活動に関係するわけではなかった．「技術が身につけられる」が有意であるボランティア活動は少なく，しかも街なかのごみ拾いや山・川・海辺のごみ拾いでは負に有意であった．ボランティア活動によっては，参加に逆に作用する動機も存在することを示している．このように一つ一つの動機には関係するボランティア活動とそうでない活動があり，動機はボランティア活動の種類に特異的に関係することが明らかとなった．

これらの結果からある程度，動機の意味を特定することができる．「身体を動かせる」は街なかのごみ拾いや農作業の手伝いにおいて係数の値が高く，老人のお世話や生物の生息地保護，子どもの遊び支援などでは有意でなかった．このことから比較的単純で長時間に及ぶ肉体的活動とこの動機が結びついており，肉体的活動であっても技術や知識を必要とするものはあまり関係しないと考えられる．「人の手助けができる」は，老人のお世話，障害者の支援及び震災支援において高い係数の値を示し，里山の保全やイベントの運営では有意ではなかった．目で見て苦境にあるとわかる人を直接的に支援することとこの動機は関係が強く，労力不足を補うといった活動とはあまり関係しないと解釈できる．このように，ここで取り上げた動機がイメージする活動の幅は，考えられているものより狭い可能性があった．

社会背景的要因及び経済的要因については，性別では，老人のお世話で女性が，雪下ろしや里山の保全で男性が比較的強い関係を示した．関係の認められない活動も多くあった．年代では，里山の保全に高い年齢が，子どもの遊び支援に若い年齢が比較的強い関係を示した．性別と同じく関係の認められない活動もあった．子持ちでは，子どもの安全監視や子どもの遊び支援に比較的強い関係が見られたが，一方その他の活動の多くでは，負に有意な関係が認められた．職業では，主婦主夫及び学生において有意な活動が少数ながら見られたが，他の職業では有意な活動がなかった．主婦主夫では，海岸での油回収が負に，子どもの安全監視が正に有意であったが，他の活動では有意でなかった．学生は，生物の生息地保護のみで正に有意であり，他の活動については有意でなかった．年収は，子どもの遊び支援においてのみ負に有意であった．

以上のように，社会背景的要因及び経済的要因においても，ボランティア活動の種類に共通して関係する要因は見当たらなかった．また同じ要因の組み合わせが関係するボランティア活動もなかった．職業と年収はほとんどの活動と関係が認められなかった．このように，職業と年収を除いて，社会背景的要因及び経済的要因も，ボランティア活動の種類に特異的に関係することが明らかとなった．なお，普段のボランティア活動への参加状況によってサンプルを分割して同様な解析を実施したところ，ほぼ表 2 と同様な結果が得られたことから，これらの結果はボランティア参加状況に影響されないと考えられた．

4.2. ボランティア活動の日常的参加

表 3 に，動機とボランティア活動の取り組みの程度との関係を示した．ボランティア活動に普段から参加しているかどうか（当てはまる：5 から当てはまらない：1 までの 5 段階）を従属変数として，第 1 列に示した 18 個の要因，例えば自然とふれあえることを期待するかどうか（期待する：1，期待しない：0）を独立変数として，重回帰分析及び順序ロジット回帰を行ない，各独立変数の係数を示した．

ある動機の充足がボランティア活動の日常的参加に関係するならば，ボランティア活動に普段から参加している人は，その動機をボランティア参加時に意識しているはずである．日常的にボランティアに参加するということは，継続的に参加するということとほぼ同じと考えられる．従って取り組みの程度とボランティアに参加する場合の動機に関係が見られた場合，その充足がボランティア活動の継続に関係するとみなされる．ただし，この表におけるボランティア活動はボランティア活動全般を指しており，そのためある活動と特異的に関係する動機の効果は，他の活動に対する効果に薄められたり，打ち消されたりしている可能性がある．また取り組みの頻度が高くても，多くの種類の活動に参加している場合も考えられ，同じ活動に従事しているとは限らない．しかしながらほぼ全ての活動に関係した動機であれば，ボランティア活動全般に対しても関係があるはずである．

「人の手助けができる」は表 2 において，ほぼ全ての活動に関係したが，表 3 の取り組みの程度とは関係が認められなかった．「人々とふれあえる」と「仲間が広がる」はさほど多くの活動とは関係しなかったにもかかわらず，取り組みの程度とは有意な関係が認められ

表 3　動機と取り組みの程度の関係

要　　因	重回帰分析	順序ロジット回帰分析	
	標準化係数	係数	オッズ比
自然とふれあえる	0.02	0.04	1.05
人々とふれあえる	0.09 **	0.16 **	1.17
身体を動かせる	0.00	–0.02	0.98
人の手助けができる	0.02	0.05	1.05
仲間が広がる	0.09 **	0.26 **	1.30
社会の役に立つ	0.03	0.03	1.03
活動が楽しい	0.01	0.01	1.01
居場所が見つけられる	0.02	0.05	1.05
技術が身につけられる	–0.01	0.00	1.00
性別	0.00	0.04	1.04
年代	0.19 **	0.17 **	1.18
子持ち	0.16 **	0.22 **	1.25
会社員	–0.06	–0.07	0.94
自営業	0.02	0.11	1.12
パート	–0.03	–0.11	0.89
主婦主夫	–0.01	0.02	1.02
学生	0.04	0.18 *	1.19
年収	0.02	0.01	1.01
定数	–	–0.76 **	0.47
サンプル数	4174	4174	
R^2	0.12	–	
–2 対数尤度	–	4273.4	

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, N = 4174

た．ただしその係数は小さく説明力は大きくなかった．社会背景的及び経済的要因では，年代（高齢）と子持ち（子どもあり）が有意であり，順序ロジット分析では学生も有意であった．

5. 考　　察

表 2 において，ボランティア活動の種類によって，有意に働く動機，社会背景的及び経済的要因は異なった．従って，ボランティアを募集する時及び応募者にボランティア活動を紹介する場合に，ボランティア活動の種類を細かく同定して，その種類に応じたその人の動機，所属するグループ，社会背景的及び経済的要因を考慮することの必要性が明らかとなった．

例えば,「身体を動かせる」を選択した人に対しては，街なかのごみ拾いと農作業の手伝いが有望な活動候補となるが,「自然とふれあえる」も選択しており子どもがいなければ農作業の手伝いが，社会の役に立つを選択していて子どもがいれば街なかのごみ拾いがより有望となる．ただし回帰式の説明力はいずれも高くなかったので，ここで取り上げた以外に重要な要因が存在し得ることに留意しなければならない．

表 3 において,「人々とふれあえる」と「仲間が広がる」が有意であり，他の動機が有意でなかったことは，社会的動機のみがボランティア活動の日常的参加に関係したように見える．日常的参加を同じボランティア活動への継続的参加とみなせばこの結果は，Tschirhart et al.（2001）の報告と一致している．しかし表 2 においては，これら二つの動機は，限られたボランティア活動にのみ関係した．この矛盾する結果が生じた理由としては以下の二つの可能性が考えられる．一つは，実際に実施されているボランティア活動の中で，これら二つの動機の関係する活動（例えば地域の観光案内）が多かった．もう一つは動機と活動への日常的参加に強い関係はなく，社会的動機に見える別の要因が働いたということである．表 2 においてほとんど全ての活動に関係した「人の手助けができる」が，表 3 において有意でなかったことから，行なわれているボランティア活動の偏りよって表 2 と表 3 の結果が異なっているという前者の説はあまり説得力を持たない．一方，後者の説を考えた場合，社会的動機が日常的参加に関係するように見えるのは，ボランティア集団の中での人間関係のもつれがボランティア参加に負に働くためかもしれない．すなわち人間関係の難しさを経験した人がボランティア参加に二の足を踏んでおり，この消極的な理由が社会的動機があるように見せている

可能性がある．あるいは逆に，開始時には意識していないが，活動する中で人間関係の広がりに付加的な喜びを感じるようになるのかもしれない．しかしながら，これらの結果は，個別のボランティア活動において直接的に確認したものではないので，日常的活動の要因については，今後さらに調査する必要がある．いずれにしても動機の充足感は継続的活動の大きな決定要因ではない可能性が指摘できる．

個別の活動においては負に働くことも多かったにもかかわらず，表 3 で有意であった社会背景的要因の年代（高齢），子持ち（子どもあり）及び学生についても同じことが言える．年齢が高いことや子どもがいること及び学生であることが直接的に日常的活動をもたらしているのではなく，他の要因の代理変数となっている可能性が考えられる．おそらくある程度年齢を重ねることにより近所や地域と強くかかわっていることや，子どもが通う学校や子ども関係の団体を通じて，ボランティア参加を呼びかけられる機会が多いこと，あるいは退職者や学生において時間的管理が比較的自由であることが日常的活動に関係していると思われるが，これについてもさらに調査の必要があろう．

次に従来の理論を検証する．Dominant status model については，表 2 において，ボランティア活動の種類によっては，現実に適合しない場合が見られた．表 3 では，年代と子持ちの二つのみがこのモデルに合っているように見えたが，これについても上記のように他の理由が考えられた．このように個人属性とボランティア参加の関係を，Dominant status model が常に予測したわけでなかったので，ボランティア活動の種類を考慮したモデルの適用の重要性が明らかとなった．

もし対象とするボランティア活動に地域の観光案内や老人のお世話が含まれていなければ，ボランティア活動への参加と男性は正の関係になる可能性が高く，逆にこれらの種類が主要な活動であれば，女性と正の関係になる可能性が高い．同じく，海岸での油回収，雪下ろし及び子どもの遊び支援などが含まれていなければ，ボランティア活動への参加と年代は正の関係になる可能性が高く，これらの活動の占める割合が多ければ，若い人がよりボランティアに参加する結果となる．時に Dominant status model と矛盾する結果が報告されるのはむしろ当然であり，取り上げるボランティア活動の種類によって社会背景的要因とボランティア参加の関係は異なると考えるべきである．

動機については，網羅的に見た場合には取り上げた動機はいずれかのボランティア活動参加の要因となったが，ボランティア活動の個々の種類とは必ずしも関係があるとは限らなかった．そのためボランティアを大括りで扱った場合には，各動機の効果は薄められて，動機とボランティア活動参加には関係が見られない可能性がある．むしろ動機も個々の活動の種類から有効なものを捜した方がよいと考えられた．加えて回帰式の説明力は小さく，動機はボランティア活動参加の主要な要因とも言えなかった．動機は，細かいボランティア活動の種類を対象とした時にはじめてある程度有効な要因となると言える．

経済的要因である収入は，ほとんど有意である場合がなく，ボランティア活動への参加を説明する要因とは言えなかった．このことは，ボランティア活動に参加することが個人の効用で説明できない，もしくは参加することのコスト・ベネフィットが効用では計量できないことを示している．動機を説明変数とする回帰式の説明力が小さかったことから，動機の充足がボランティア活動参加の主な理由ではない可能性があり，この場合，個人の効用がボランティア活動参加をもたらすという仮定を採用することは，困難と言わざるを得ない．今回は収入を経済的要因として用いたが，経済モデルについては，賃金率など他の要因を取り上げるなどさらなる検証が必要と考えられる．

以上のように，ボランティア活動の種類を考慮しないで見出された要因は，個別のボランティア活動開始時の要因とは異なることに留意する必要がある．そうでなければ，ボランティア募集やボランティア活動の紹介の方法を誤ることになる．

次いで，本論の限界について述べる．表 2 の個別の活動については，この調査は参加の意向を聞いているのであって，実際の行動を質問しているのではない．実際にこれらの活動を開始する人は表の数値よりも少なくなるはずである．また参加の意志があっても何らかの障害があって参加できない場合も考えられ，この場合には障害を除くことの方が，参加意志に結びつく要因を探ることよりも重要となる．またボランティア参加の程度は，参加頻度の主観的な感覚を質問しており，定量的な参加回数や参加時間を用いていない．この種の調査においては，調査方法に由来するバイアスがある可能性も否定できない．今後，実際の参加者や参加状況を調査して解析するなど，さらに検証が必要である．

6. 結　　論

本論の基本的問題意識は，ボランティア活動を細かく分けた時に，動機は活動への参加と関係するのか，関係するとしたらその効果はどの程度かを把握するこ

とであった．これを明らかにするために，動機，社会背景的要因及び経済的要因とボランティア活動の種類との関係を，クローズドタイプの WEB 調査を用いて検討したところ以下のことが明らかとなった．

1）ボランティア活動への参加開始には，その活動の種類に特有の動機が関係し，一方，すべての種類のボランティア活動に共通して関係する動機はなかった．
2）社会背景的要因についても，要因によって関係するボランティア活動の種類は異なった．係数の正負（たとえば女性か男性か）もボランティア活動の種類によって異なった．
3）経済的要因である収入はボランティア活動への参加に対して関係が見られなかった．
4）以上から，応募者の持つボランティアに対する動機と社会背景的要因から，興味を持ちやすいボランティア活動の種類を選択することが可能であった．
5）動機の充足とボランティア活動の日常的参加との関係は認められなかった．

このように，ボランティア参加と関係する要因は，ボランティア活動の種類を考慮しない場合は正確に把握することが困難であることが明らかとなった．ボランティア希望者と受け入れ団体を橋渡しすることを考えた場合には，その人が望む活動を把握することが必要であるから，個人の特性からその人が参加したいと思うボランティア活動を細かく絞ることができれば非常に効率的である．つまり，ボランティアを募集及び仲介する場合には，より詳細なボランティア活動の種類とボランティア参加要因における個人の特性の関係を明らかにして，適切にボランティア活動の情報を提供することが望ましい．

各地のボランティアセンターなどにおいて，ボランティア希望者と受け入れ団体のコーディネーターの課題の一つは，希望者のかなりの部分が「何かしたい」が「何をしたいかはっきりしない」人であり，他の多くの人の希望も「子ども関係」や「国際関係」といった漠然としたものであるため，希望者の欲するものを把握することと言われている．今後，ボランティア活動が盛んになれば，希望者が増えることが考えられ，その際には，ますますコーディネーター機能を強化することが必要となる．

それ故，ボランティアの募集及び仲介時において，ボランティア活動の種類を反映した動機などの要因を用いることで参加希望者に適切なボランティア活動を紹介して，コーディネーターを支援することが期待される．今後，実際のボランティア参加者において，これらの結果を検証していくことが必要と考えられる．

Final version accepted August 20, 2010

参考文献

跡田直澄・福重元嗣（2000）「中高年のボランティア活動への参加―アンケート調査個票に基づく要因分析」『季刊社会保障研究』vol.36, no.2, pp.246–255.

Auslander, Gail K. and Litwin, Howard (1988) Sociability and patterns of participation: Implications for social service policy, *Journal of Voluntary Action Research*, vol.17, no.2, pp.25–37.

Chinman, Matthew J. and Wandersman, Abraham (1999) The benefits and costs of volunteering in community organizations: Review and practical implications, *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, vol.28, no.1, pp.46–64.

Clark, Peter B. and Wilson, James Q. (1961) Incentive systems: A theory of organizations, *Administrative Science Quarterly*, vol.6, no.2, pp.129–166.

Clary, E. Gil; Snyder, Mark and Ridge, Robert (1992) Volunteer's motivations: A functional strategy for recruitment, placement, and retention of volunteers, *Nonprofit Management & Leadership*, vol.2, no.4, pp.333–350.

Freeman, Richard B. (1997) Working for nothing: The supply of volunteer labor, *Journal of Labor Economics*, vol.15, no.1 part 2, pp.S140–S166.

飯塚市（2001）「飯塚市ボランティア意識調査」（http://www.NPO-homepage.go.jp/data/report21_1.html）2008/6/23.

Lemon, Mona; Palisi, Bartolomeo J. and Jacobson, Perry E. Jr. (1972) Dominant status and involvement in formal voluntary associations, *Journal of Voluntary Action Research*, vol.1, no.2, pp.30–42.

Menchik, Paul L. and Weisbrod, Burton A. (1987) Volunteer labor supply, *Journal of Public Economics*, vol.32, no.2, pp.159–183.

Mori, Yasuhumi; Mori, Kenzo; Inuzuka, Hiromasa; Maeda, Yasunobu; Asano, Toshihisa and Sugiura Syougo (2008) Determinants of volunteering based on a theory of volunteer opportunity, *Environmental Science*, vol.21, no.5, pp.391–402.

森保文・前田恭伸・淺野敏久・井田国宏（2008）「ボランティア参加のコスト・ベネフィット―佐鳴湖浄化のためのヨシ刈りを例として」『環境システム研究論文集』vol.36, pp.483–489.

森山智彦（2007）「教育訓練による投資的動機の充足と NPO 活動の継続」『ノンプロフィット・レビュー』vol.7, no.1, pp.1–12.

内閣府（2005）「NPO（民間非営利組織）に関する世論調査」（http://www8.cao.go.jp/survey/h17/h17-NPO/index.html）2006/9/4.

労働政策研究・研修機構（2005）「インターネット調査は社会調査に利用できるか」『労働政策研究報告書』no.17, 労働政策研究・研修機構.

桜井政成（2005）「ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異」『ノンプロフィット・レビュー』vol.5, no.2, pp.103–113.

桜井政成（2007）『ボランティアマネジメント』ミネルヴァ書房.

Smith, David H. (1994) Determinants of voluntary association par-

ticipation and volunteering: A literature review, *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, vol.23, no.3, pp.243–263.
Sundeen, Richard A. and Raskoff Sally A. (1994) Volunteering among teenagers in the United States, *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, vol.23, no.4, pp.383-403.
Tschirhart, Mary; Mesch, Debra J.; Perry, James L.; Miller, Theodore K. and Lee, Geunjoo (2001) Stipended volunteers: Their goals, experience, satisfaction, and likelihood of future service, *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, vol.30, no.3, pp.422–433.
山内直人（2001）「ジェンダーから見た非営利労働市場―主婦はなぜ NPO を目指すか ?」『日本労働研究雑誌』vol.515, pp.30–41.

要　　約

ボランティア参加を促進するために，ボランティアの参加動機に関する関心が高まっている．しかし実証研究においては，動機とボランティア参加の関係は明らかになっていない．本研究では，ボランティアを効果的に募集するため，ボランティア活動の種類による参加要因の差異について検討した．動機，性別などの社会背景及び経済的要因と参加したいボランティア活動の種類の関係を，WEB 調査のデータを用いて解析した．その結果ボランティア活動ごとに関係する動機と社会背景が異なった．そのため応募者の持つボランティアに対する動機及び社会背景から，興味を持ちやすいボランティア活動の種類を選択することが可能と考えられた．

キーワード：職業，年齢，性別，子持ち，Dominant status model，活動継続